

災害

Disaster Volunteer GUNMA
Voluntarios de Desastres GUNMA

ボランティア

ぐんま通信

第7号

2011.3

企画・発行・編集 ■ 災害ボランティアぐんま
災害ボランティアぐんま事務局（昭和庁舎1階）
〒371-8570 前橋市大手町1-1-1
Tel & Fax 027-221-5771
URL : <http://www12.wind.ne.jp/saivol/>
E-mail : saivol-g@dan.wind.ne.jp



富岡で県総合防災訓練

市社協とボランティア受入

22年度の県総合防災訓練（主催・群馬県、富岡市）が9月18日、富岡市蚊沼の（株）稲葉製作所富岡工場建設予定地で行われ、富岡甘楽広域消防本部や県警、自衛隊第12旅団など80余りの機関、団体が参加した。

震度7の直下型

地震を想定した訓練は、建物倒壊や土砂崩落による救出、救助、火災発生での消火、多重交通衝突事故による救護など、ドクターヘリも搬送に加わる大規模なもの。テロリストによる有害物資の散布を想定した対処訓練も見物の人たちの目を集めていた。

災害ボランティアぐんまの会員18人は、同市社会福祉協議会が立ち上げたボランティア受入設置訓練に参

加。県警や自衛隊のヘリが上空を舞う中で、受付やニーズ、マッチング、送り出しの係に分かれて機敏に行動、救援物資の配布にも小走りで移送した。なお、23年度の県総合防災訓練は高崎市で行われる。

命の大切さを再確認

山本和久（高崎市）

防災ボランティアを意識し、登録して初めて防災訓練に参加した。「ボランティア受け入れ訓練」を体験したが、何をどうしたらよいのか先が全く読めず、先が真っ暗でした。あの目まぐるしい騒音の中で説明を聞くもの大変でした。受付を済ませてから自分の担当が決まるまで、一緒に行動する仲間の理解、活動する内容の理解など苦痛に感じました。

ボランティアの心得は一応理解していたつもりであったが練習でこのようでは本番ではもっと大変だと思いました。この体験の中で自己管理、仲間理解と協力、正しい情報の収集と判断力、きめ細かな思いやりの気持ちなどを学びました。本番は望みませんが、もしもの時には積極的に臨みたいと思います。

今回の防災訓練も実践しながら、訓練を訓練とせず本気で取り組んでいる姿には頭が下がりました。

災害に備えて初の交流会

炊き出し、機材訓練も

災害現場で効率良く救助などの活動をするには、会員同士が知り合いの方がやりやすいと、平成22年10月23日、前橋市上細井町の県地域防災センターで、初めての会員交流会が開催され、30人が連携を深めた。

交流会は、海野卓巳さん（会員）と四方田正美さん（同）の指導で、ハイ

ゼックス炊飯の炊き出し訓練から開始。無洗米を袋詰めしたが、中には炊き込みご飯に挑戦する人も。レスキューキッチンでの操作では、給油や点火に四苦八苦しながらも、やっと沸騰した湯の中に投入。レトルトカレーの袋も温め、30分かけてやっと試食タイム。

「思ったより美味しい」「避難先で温かいご飯が食べられ



たら元気が出る」などと会話が弾んだが、中には「ご飯の量が多すぎた」「まぜご飯の具に工夫が必要」といった反省の声もあった。

富沢豊さん（会員）提供のコーヒーやお菓子を楽しんだ後、県危機管理室の大澤拓さんの案内で防災センターを見学。地震や風水害時の大規模災害の対策拠点としての本部などのほか、投光器など防災資機材、毛布、非常食（アルファ米、乾パン、飲料水）などが備蓄されている

倉庫を見て回った。

大澤さんの「水も電源も3日間は確保されている」「備蓄倉庫は行政事務所や土木事務所、27の県立高校にもある」との説明に、会員たちは「しっかりと準備されている」など、感想を述べていた。

午後からは、阪神淡路大震災でボランティア経験のある高崎経済大の伊藤亜都子准教授（理事）の司会で、参加者たちが自己紹介したあと、災害時の心構えや経験談を披露。会員同士の交流を深めた。

「交流会」に参加して

十河 正代（高崎市）

「ハイゼックス炊飯と情報交換会」という事で、久しぶりの災害ボランティアへの参加だった。炊き出し体験には一度参加していたが、今回は友人から「小学校で炊飯袋を使った保護者行事がある」と聞き、その友人も一緒に参加させていただいた。

前回は既に用意万端状態のレスキューキッチンにハイゼックス炊飯袋での炊き出しをしたが、今回は会員が灯油を入れるところから操作体験をする事になった。今回の体験は有意義なものだったと思う。また、「取り扱い説明書」が付いていたので、いざとなったら女性でも操作することは十分可能

かもしれない。

また、情報交換会での他の会員の話は大変興味深いものだった。他県から群馬に越して来られ、体力的には実際に被災地に向くのは難しいが、地元の方との関わりを持ちたいという理由で行事には参加しているという方。いざという時のために日頃から体力気力を養うべく、週に170キロも歩き、今までの距離をトータルすると、あと数年で地球一周するほどになるという方等々。皆さんそれぞれが災害ボランティアに自分なりの思いを持って参加していた。

今回いろいろな方のお話を聞いて、「災害時に自分の役割を果たす為にはまず体力をつけ健康である事、自分の食糧は最低限準備しておく事が肝要である」と、気付くことができた。



災害時の救援法など学ぶ

リーダー養成講座に31人

11月27日に県庁昭和庁舎で、防災知識を身につけて地域での防災活動に貢献するとともに、災害発生時にボランティアとして活動できるリーダーを養成する講座を開催、31人が学んだ。

午前中は、災害ボランティアネットワーク青木桐生の青木講一さん、NPO法

人わんだふる代表理事の赤羽潤子さんが活動事例を紹介。

青木さんは阪神淡路大震災を始めとする支援活動で、被災者との交流で仮設住宅がなくなるまで続いたことや、4年前から桐生市内での自主防災活動状況を披露。日ごろから「災害弱者」



へのサポートやケアの大切さを強調した。また赤羽さんは、高崎市内での高齢者、障害者の居場所づくり、防災マップづくり、子育て支援など、日ごろから地域でのコミュニケーション、助け合いの活動ぶりを話した。

午後はNPO法人「おぢや元氣プロジェクト」代表、若林和枝さんが中越地震で被災した経験から、住民の交流の場づくり、元氣な子育て、里山再生などの活動を報告。地域の活性化によって新潟・小千谷市民が元氣に夢を持って生活できるよう取り組んでいる姿を紹介した。

最後に前橋市消防本部の職員が、正しい心臓マッサージ、AED（自動体外式除細動器）の使用法を説明。参加者たちは真剣に実習していた。

東京の防災訓練に14人参加

東京都・文京区合同総合防災訓練が8月29日、同区の白山通りや東洋大学キャンパス、都立小石川高校などで実施され、会員ら14人が参加した。

一行は小石川高校での負傷者の救護訓練で汗を流したあと、約2キロ離れた



た白山通りで緊急サイレンが響く中で行われた車の多重衝突、倒壊した信号機や電柱を避けて横転したトラックからの荷物の散乱の処理などを見学。東洋大構内でも家具などの転倒で身動きできなくなった負傷者の迫真あふれる救助を見て回った。

その後、大規模災害に備える基幹的広域防災拠点として完成したばかりの江東区有明の東京臨海広域防災公園内の「そなエリア東京」へ。首都直下地震の発災から避難までをクイズで注意事項を確認しながら防災の大切さを学び、建設中のスカイツリーを車窓から眺めながら帰途についた。

平成22年度総会・講演会

平成22年度「災害ボランティアぐんま」の総会は5月15日、県庁で開かれ、21年度の事業報告、収支報告と22年度の事業計画、収支予算をそれぞれ承認。また発足以来4年半にわたって理事長として活動を支援した牛久保雅美氏の退任申し出を受けて、後任に児玉三郎さん（小島鉄工会長）を選任した。

次いで記念講演会では、NPO法人レスキューストックヤード（名古屋）代表理事、栗田暢之さんが「地域で日常活動が生み出す『事前防災』」と題して、日ごろの活動ぶりや持論を話した。

この中で栗田さんは「災害発生時に多くのボランティアが殺到すると、取



り組みが画一的になり、小さなニーズが見つけられない。被災者本位、地元主体でゆつくり丁寧な活動を心がけるべき。また、マニュアル頼りで形、仕組みを重視するあまり融通が利かない被災者不在の場合もある」と注意喚起。地震や火山噴火、水害など災害の種類、都市部が山間地か、でも対応が異なることを力説した。

このほか日ごろ、自分の住む地域での防災にも関心を持ち、かつての災害の様子を古老に聞いて危険箇所を確認。多くの人に伝えるなど、油断や過信せず地道に持続できる体制づくりも呼びかけた。

児玉理事長の就任挨拶

牛久保前理事長の後を引き継ぎ、理事長に選任されました。



私は企業経営者としての立場から「災害ボランティアぐんま」に参加しました。近年、

企業においても社会的責任の取り組みの一環として様々な社会貢献・地域貢献活動が進められています。

本県においても、災害はいつ起こるか分かりません。今後とも、「災害ボランティアぐんま」が、多くの県民の方や企業、団体を巻き込んだ幅広い組織

として活躍いたしますよう会員皆様のお力添えをお願い申し上げます。

県危機管理フェア

「県危機管理フェア」が平成23年1月14、15の両日、県庁ホールと県民広場で開催された。県民に災害やテロなどの情報や対処方法を正しく理解してもらおう狙いで自衛隊や警察、消防、気象台、国土交通省利根川水系砂防事務所、同高崎河川国道事務所が保有する防災・救助の装備資機材を展示。また災害への対応、自主防災の役割、などをテーマとした講演会も行われた。

「災害ボランティアぐんま」も活動の様子を紹介した写真パネルを展示したほか、係員として参加した会員が会場を訪れた人たちにパンフレットを手渡して活動内容を説明した。



編集

後記

災害ボランティア通信第7号を発行することができました。

今回は、本会として初めて実施した「交流会」の記事を2ページに掲載いたしました。昨年10月、前橋市にある県地域防災センターを会場に、炊き出し訓練と情報交換会というプログラムです。従来の防災訓練への参加や研修会などと異なり、単に訓練を体験するだけではなく、会員の皆さんの相互交流の場を設けました。お陰さまで、参加いただいた方々にも好評だったようです。今後このような、会員相互交流の場も設けて行きたいと思っておりますので、よろしく願います。

今年度も大きな災害がなく、無事終わるのかと思っていたところ、3月11日、東北地方太平洋沖地震が発生しました。この原稿の執筆段階では、本会としての対応もまだ決まっていませんが、史上最大規模の災害となりそうです。この地震に関しては、緊急特集の発行を予定していますので、ご覧ください。